シリーズ隠れた建築紹介　～南の城～

浦島太郎が亀に招かれてしばらく滞在した城は南の島にあるらしい。ここでは、城が、丘の上で船のようにそそりたち、太陽が溶け込む西の海を向いている。すでに日が暮れた長い夜、ここで呑まれた酒の話しから始めよう。ややとげとげした新しい酒は、アルコール分45％に近い透明な原酒であった。この火酒で喉を焼くこともできる。あるいは、この酒を５～６年貯蔵すると、淡く黄色になり、その味は真にまろやかだ。この酒を瓶にいれたまま一つ一つ柄杓でつぐ。酒が減れば新しい酒を瓶に注ぐ。加えられた新しい酒は、数年を待つこともなく、古い酒にじきになじんで、瓶全体がまろやかになる。

酒という酒を飲み干した夜明けに、城壁の隅にたつ物見によじ登った。ここよりして都が一望隈なく眺められる。城の周りは無数の家々が取り巻いていた。赤々とした三角の屋根が林立するこの都が落ちついた姿になるには永い年月が必要だったと土地の古老がいう。14世紀後半から15世紀前半にかけて、この国の王は都を大きく改造した。王家の菩提寺と墓地を造り、礼拝所をたて、貯水池をほり、書庫を構え、在地の首長たちをここに集めた。市もできた。以来、古い家族は古い家に住んだ。そして、古い家族が新しい建物を建て、新しい家族が古い建物に移り住んだ。さらに、新しい家族が新しい建物を建てた。この都は、ゴムのように伸び縮みする時間のなかで、新しい家族や新しい建物を、古い家々のなかに徐々に加えてきた。ひとたび形をなした古い家々は、この高見からみると、もはや彫刻であった。

この都が戦火で粉々になったのは52年前である。今われわれが再び構築された城壁の上にたつとき、あの姿は記憶のなかで煙のように見え隠れする遠い陰翳なのだろうか。

滲むように太陽が西の海に沈んでも、あの朝の光のままに、あの朝の形態が存続しつつあるように思われる。

―広報部会・土本俊和

北陸支部インフォメーション

■建築探訪「富山の歴史遺産―城端、井波の町並み」

〈蔵回廊〉は昔からある蔵４つをガラスやフレームの回廊で結びつなげた町の展示館である。私の中にあった「蔵はじめじめした暗くて怖いもの」というイメージは取り払われた。現在と過去が混在し、蔵の町城端に不思議ととけ込んでいる。回廊の天窓から差し込む台風開けの日差しがすがすがしく気持ちよかった。城端の町に出てみると、昔からの木造民家が残っていたり、それを現代風にアレンジしたようなカッコイイ家があったりという町並みである。井波

町では瑞泉寺、善徳寺を見た。いったい何畳あるのかと思うほどの広さにも、あらゆる所の木彫り細工にも、寺のスケールのでかさには改めて驚かされた。ウサギや茄子の釘隠しなんて！　昔の人のセンスの良さが光っていた。

―富山美術工芸専門学校２年生・小野田篤、津田佳之

（大伽藍瑞龍寺の復元を手がけた上野幸夫先生の解説ということもあって、参加者68名のにぎやかな見学会であった／広報）

■支部大会見学会

本年度の見学会は、７月25日（金）に行われ、1998年冬季オリンピックの会場となる２施設を中心に見学した。学術講演発表会の前日であったにもかかわらず、参加者は42名に達し、家族連れ会員の参加もあり、盛況であった。まず、吊り屋根が特徴的なエムウェーブ（スピードスケート会場）を見学し、その後、花をデザインモチーフとしている開閉会式場を見学した。各施設では、長野市から説明を受けた。帰りに、屋根が特徴的なホワイトリング（フィギュアスケート会場）を車中より見学した。以上の成果として、高度な国際競技施設の建築技術を実際に目にしたこと、今後のオリンピック報道時に実際の施設がイメージできること、があげられる。

―信州大学・山口　満

■支部大会シンポジウム

７月26日の14時から16時までホテルメトロポリタン長野で開催された。タイトルは「どうする？環境教育！環境教育の現状と課題」であった。大学における環境教育の現状を報告し、小学校・工業高校における事例発表をして大学の教育との関連をはかるという主旨で行われた。参加者は54名であった。最初に建築学会の活動や北陸支部所属大学・高専へのアンケート結果が報告されたあと、小学校・工業高校での環境教育の事例発表があった。その後の討論ではパネラー同士の意見交換、フロアからの質疑も相次ぎ、熱心な討論となった。広報活動がうまくいかなかったこともあり、参加者が少なかったことが残念であるが、今後の環境教育を考える上で多くの示唆に富んだシンポジウムとなった。

―信州大学・高木直樹

日本建築学会北陸支部ニュース「AH！」第11号

発行日　1997年９月15日発行

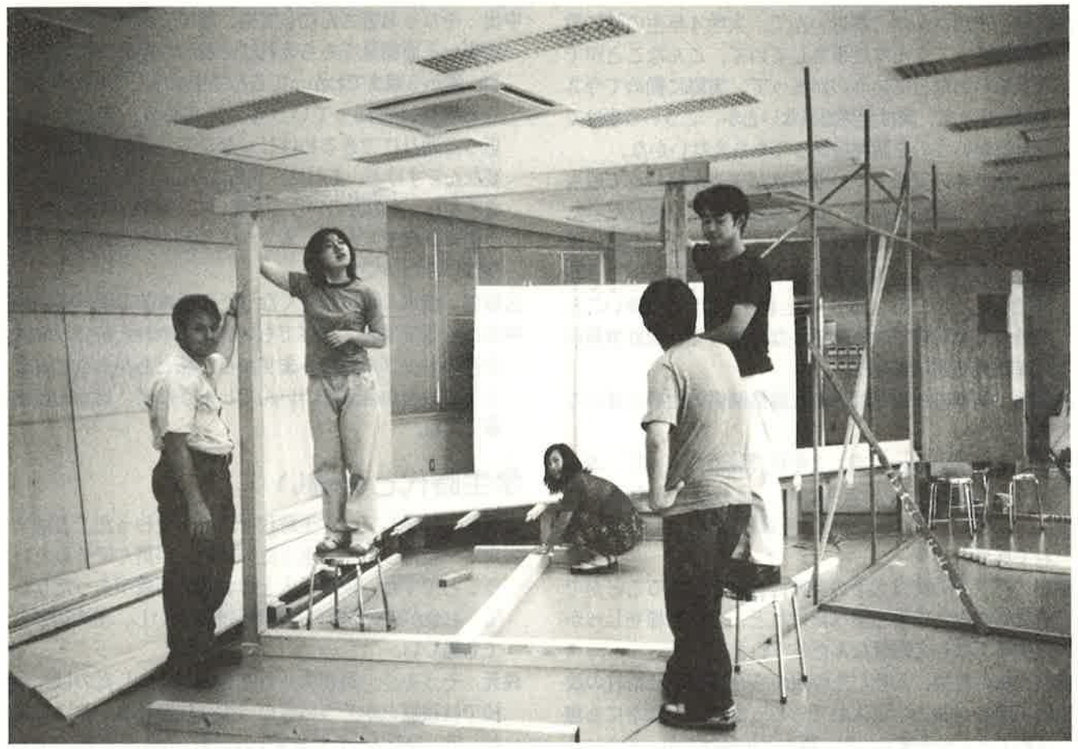
発　行　日本建築学会北陸支部広報部会
光高　啓二（新潟）　加藤　則子（富山）
船戸　慶輔（石川）　後藤　正美（石川）
桜井　康宏（福井）　土本　俊和（長野）

事務局　室田　文男・瀬口さゆり
〒920　金沢市玉川町15-1　パークサイドビル３F
TEL & FAX　076-220-5566

AH! HOKURIKU
第11号

特集

仕事と夢の共生



支部ニュース「ＡＨ！」の第11号をお届けいたします。５つの支所が巡送りで担当している特集シリーズも３巡目に入り、今号からは最近脚光を浴びている「共生（共に生きる）」というキーワードに注目し、広くは「環境と人間の共生」「自然と建築の共生」から「多民族の共生」「男女共生」「異世代共生」「親子共生」「高齢者や障害者の地域での共生」等など、各支所独自の発想で自由に展開していただくことにしました。

第１回の今号では「仕事と夢の共生」という、部会長の予想を超える展開がいきなり登場することになりましたが、いろいろな発想が互いに殺し合わずに共に生きること自体がまさに「共生」であることを改めて思い知らされました。そして一方では、この広報誌「ＡＨ！」の発行も、遠く離れた北陸支部の５つの支所の「共生」にとって少しはお役にたっているのかナ？……などと自問してみたくもさせられました。

仕事と夢の共生

広報部：大学時代にどんな事をしようかなぁというのがあって、仕事についてるとできなかったり、仕事をしているうちに新しい希望ができたとかいうことがあったら、何でもざっくばらんに話してもらえればいいかなぁと思います。

やりたいことと就職活動

広報部：古田さんが一番近いんで、大学４年生の時に設計事務所ってこんな仕事をしていて、こんなことができたらいいなっていうのがあって、実際に勤めて今３年経ってみて、実は全然出来ないとか、こういう事はできたとかいうのを話題提供してもらえないかな。

古田：私の年の就職っていうのはバブルが終わって超氷河期の中の就職活動で、女子も急に増えた年代だったんですけど、女子で資料送ってくださいとか企業に電話しても門前払いで相手にしてもらえないっていう状況でした。そこで、したいことをやっていけば辛いことがあっても我慢できるだろうなと思って、設計事務所に進む道を選びました。

広報部：同期の女の子はみんな建築関係の仕事に就いてるの？

古田：そうでもないです。２年目で辞めちゃって、ぶらぶらしてる子とかいますから。自分はこんな事したかったんじゃなかったっていう疑問が湧いてきて、それで辞めちゃう。

中出：バブルの時は大手の会社にどんどん入ることができて好きなところを選べたけれど、今は目標をしっかり持ってないと駄目なんだろうねぇ。

古田：私の場合、入社した時点から金沢市民芸術村の改修工事のグループに入れてもらったので、仕事にも恵まれてとても幸運でした。再生とか保存とか、そういうのに直接関われたから、金沢でしかできない仕事をさせていただいてすごく楽しかった。苦労も多かったですけど、できてからの利用者の反応が想像以上に良かったし、そういうのがすごく充実感。現場ですごい苦労したんですけど、オープン以来好評なので、それがすごい設計していて良かったなと思います。

南出：小さいゼネコンさんになると女の子でも平面から何からやってますね。照明の会社行った子とかもいるんですけど、みんなどうしてるのかなぁ。やっぱりやりたいことやってるっていうのが一番よね。

中出：ゼネコンの仕事も変わってきてますよ。今の部署がリフォームセンターっていいまして、主に改修、まぁ小さい工事もあるんですけども、お得意先からの苦情とか、この部屋改修して欲しいとかいうことを扱ってる部署なんですよ。

南出：そんなしょうもない商売もするんですか？(笑)

中出：そりゃお客さんにしても、建ててもらったところにずっと面倒見てもらえれば一番いいと思うんですよね。隅から隅までわかってるんですから。でも、やっぱりお客様は神様っていう考えですから、自分たちが思った通りにできるわけじゃなくて、多少の我慢も必要なんですけど。それに、判断はみんな上の方がなさりますから、上の方のいうこと聞いて、それでやれっていう歯車社会ですから、本人がどう思おうがあんまり関係ないみたいです。

広報部：清水くらい大きくなったら歯車的な所が多い？

中出：そうですね。赤字でもいいからやれとかいうのは会社のトップが判断しますから、私どもがもうちょっと下さいとか言えばいいんでしょうけど、ほとんど歯車ですね。

学生時代との違い

広報部：就職して、学生時代と大きく変わったことは？

古田：一番違うなぁと思ったのはお金が絡んでくるということですね。現場の人とのお金の葛藤があったりして、お金が成立しないと物事が進まないし、その辺がとても難しい。

森元：そうそう、最初入ったときびっくりしたのは、学校では積算とかそういうのって全然習わないわけですね。で、役所入ったらまずそれが第一なんですよ。もう、プランニングよりもまず金ありきって感じで。

古田：見積りっていうこと自体が全然知らない世界だった。ほんのちょっとの土の量は現場では変わらないんじゃないかって思ってたから、官庁物件やったとき、数量根拠を作って設計書を作っていくっていうあれは全然理解できなかった、最初は。

森元：おまえ建築出てきたらそのくらいわかるだろうっていう先入観念で話をするわけですよ。ところがどっこい、僕らは学校で積算なんて「せ」の字も(笑)。

垂水：本屋さん行くと建設物価なんて本あるじゃない？あんなの学生さん絶対買わないよねぇ。

古田：あれはなんかやっと必要な事だって分かった。就職して分かりました。

垂水：必要なもんだって頭では理解できるんだけど、学生さんはそんな本買わなくって、住宅建築とかＳＤだとか、そんな本買うんだよねぇやっぱり。そりゃそうだ。学生さん値段なんて気にしてないし、学費はほとんど親掛かりだしね。

古田：こういうのに仕上げしたらきっときれいだって思ってやってみても、とんでもなく高かったりとかして。そういう感覚は学生時代は全然ないからギャップが激しいですね。雑誌で出来上がってるから、きっと出来るだろうとか思っちゃうけど、実際はそんな甘くない。

広報部：お金と密接に関わる住宅はいかがですか？

山口：実際にお客様の御予算があって、その中でいかに設計者としてのこだわりも含めてメリハリを付けてお客さんに提案できるか。言葉悪いですけど、人のお金でふんどしとるような所があります。あとはお金の予算配分をお客さんがどこに価値観をもっているかを見極めて、そこにお金を使う。それ以上になった時には、こんなことしたいんでこれだけかかるんですけどどうですかという提案を含めて折衝していくという段階が現状のお金との話ですね。

中出：やっぱりお客様との食い違いが多少出てくるんですよね。そこが今私も悩んでる点なんですけども。お客さんの予算に合わせてやらなきゃいけないんでしょうけど、少しでもいいものを提供して納得してもらえるようにしようと思ったら、それだけかかっちゃうんですよね。赤字でやろうと受けざるを得ない状況なんでしょうけどね。

山口：うちの場合、設計・施工でやってますんで、設計事務所と施工会社とお客さんとの関係で、若干自分で動かしきれない部分があると思うんですよね。ある程度決まった段階で、施工会社がある程度飲まなきゃならないという絡みもあるんですけど、最終的にお客さんにとっていい家作りなら、それに対してお金を出してもいい。いい建物作る意味合いなら、お金を出す。社内的なコンセンサスは別にして、みんなそんな思いでやってます。

金沢市民芸術村（金沢市大和町／提供：㈱金沢計画研究所）

仕事の充実感

広報部：ではちょっと話題を変えまして、仕事をしていて一番充実感を感じるときはどんな時ですか？やっぱりアフターファイブとか？

南出：さぁ、飲みに行くかぁー中びんでも、ってね。あ、ビールちょうどない(笑)。それは冗談として、そうですねぇ、大手のゼネコンとってきたときとかぁ、あとは完成したとき。

森元：大手のゼネコンさんだと、現場に張り付いてるときは日曜もないくらい忙しいけど、引き渡しが終わったら１ヶ月以上休みとかみたいですからねぇ。

垂水：逆に、ものが出来上がる前が一番充実してますとかは？建っちゃうとがっかりする部分がちょっとありますとか(笑)。

広報部：設計してると、ディスカッションしてるときが一番面白いんだろうなぁ。ああでもない、こうでもないと。

古田：う～ん、公共物件をやっているときは、打ち合わせっていうのは雲をつかむような話ばっかり。というか、相手が見えないので、できてからの皆さんの反応を見たときに充実感がありますね。一番充実感を感じる

㈱金沢計画研究所　古田 陽子さん

㈱玉家建設　山口 元治さん

野々市町産業建設部　森元 裕さん

㈱堀江ガラス　南出 信子さん

清水建設㈱　中出 秀人さん

金沢工業大学　垂水 弘夫さん

広報部　後藤　正美

のは、その建物で生き生き動いてる人を見れたっていう時間です。

設計者の期待に反する現実

垂水：余談なんだけど、建築学会とか賞出すでしょう？デザインで出すじゃない？あれ良くないと思うんですよねぇ。建物っていうのは、そこを職場にする人とか訪ねてきた人とかが使い勝手がいいとか、動線がシンプルで使いやすいとか分かりやすいとか、そういう部分を評価しなくちゃいけなくて、人が入って使い始めて1年ぐらいしてみんなにアンケートして、これがいいっていう風にしないと。竣工した途端に、デザインがすごくいいとか、プランニングだけ見てこれはいいとか、そりゃユーザーの立場とか使う人の意見とか全然入ってないわけねぇ。作る側の論理だけ。

古田：建築雑誌とか、そういうのって竣工後間もない写真出しますよねぇ。だから、全然生活感がなかったり、人が写ってない。で、実際行ってみると全然違う使われ方してるっていうのがよくありますよね。

垂水：この方がいいとかね(笑)。

古田：だから、建築雑誌で竣工後間もない写真ばっかり載せるっていうのもどうかなとは思うんですけども。

垂水：そうだよ。で、そういうのを見て学生さんが設計事務所行きたいとか言うんでしょ？その辺がちょっとね、問題あるよなぁと。だから、学生さんにもうちょっとその辺をアピールしておいてもらった方がいいかなぁと。

南出：貰いただいても、5年も経たずに建替えるっていうのもいっぱいあるらしいですねぇ。

中出：やっぱり、建物っていうのは使わないと価値ないですからねぇ。

森元：私がよく耳にするのはですね、建築した設計者のコンセプトと物が、出来上がってクライアントに移ったら全然予期してないような使い方をしてるとかいうことですね。こういう意図で作ったから、こういう家具を置いて欲しくないとか思っていても、事業費の関係で全然別のイメージのものが入ったりとかすると、設計者はもうガクっとしてしまう。何でああいうものに変わってしまうんだって(笑)。

山口：多分ユーザーの希望するとか期待するところとちょっと違う設計になってしまったとか。ニーズ調査がちょっと足りなかった部分があるんじゃないんですかね。

森元：クライアントに対してはっきりこういう意図で設計してあるんだって言うんなら、公共建築っていうのは役所の担当が2年3年で替わってしまうから、それが未来永遠に引き継がれるかっていうとなかなか難しいんですよね。

垂水：ただ、例えばさっきの芸術村なんかもそうだけど、ああいう所っていうのは空間は何でも使えるようにフレキシビリティ高く作っておいた方がいいなとか、そういうのがあると思うんだけど、公共建築の場合、割と予算が決まってて、面積も決まってるから、キチキチで作ってしまうとどうしても後で違う使われ方をする部分が多くなるんでしょうね。

こだわりと夢

広報部：では、これだけは譲れないとか、拘りを持っていることはありませんか？

垂水：北陸の人は目に見える部分を大事にしますからねぇ。面積が広いとか、門構えが立派だとか、建物の構えが…。そういう所にお金かける人ばっかりで。玉家さんもひょっとしてそんなとこで飯食ってるんじゃない？

古田：でも玉家さんは目に見えない所のこだわりもたくさんあるんじゃないかと思うんですけど、どうやって説得されてるんですか？

山口：両方こだわってますから(笑)。建築家の我ばっかりでも言われますし、歴史に残るような建物を作りたいという自負も持っているんで、その絡みで一番悩むのが30代じゃないかな。20代はがむしゃらなんですよ。どんなことでも吸収できるんですね。建築の「け」に触れるだけで満足だというのが20代ずっと。

広報部：その時は夢に向かってまっしぐら？

山口：私らの頃はポストモダニズムの全盛期でしたから、安藤忠雄とか毛綱毅曠とか六角鬼丈とか、あの辺を卒論で書いてる時代だったんで、ある種の憧れが夢でしたね。20代はそれを人と出会う中で吸収する一方ね。今は自分なんか30代になって、歳知らずといわれるかもしれないけど、まだ夢があると。その夢は、大学時代に思ってた夢もそうなんですね。現実を知った今では、不思議と軌道修正されてますけど、自分の方向性がどこにあるのか模索してますね。それが夢なんで。

垂水：若いときの夢はまだ持続しておりますと。

山口：それがあるから建築やってることも事実なんで。「好きこそ物の上手なれ」ってあるでしょ。そんな感覚で今、好きだからできる、好きだから夢中になれる、好きだから…

垂水：12時までいても平気だと。

古田：平気じゃないですよ(笑)。

山口：で、1日2食でもできると。まぁ、ただ美容と健康のために、それはやっぱ週休2日の娑婆なんで改善しないといけないと思うんですけど、その辺の精神があって初めて仕事も出来るんかなぁと、そんな気はするんですよね。

広報部：なるほどいい話でしたね。これからも、皆さん夢の実現のためにお仕事頑張ってください。

－1997年6月18日収録－

山の魅力

最近世の中の流れがとても早い様に感じる。人々は、特に若い人はそれに乗り遅れないように、瞳をギラギラさせている。情報はめまぐるしく飛び交い、バーチャルリアリティの世界にのめりこんでいく。そんな中で今、中高年の人達の登山人口が増え、ブームといえる状態である。

なぜ人気が高まってきたのだろうか。休日が増えた等の社会的要因もあるだろうが、何といっても山の魅力は、そのふところの広さ、深さにあるのではないだろうか。そして付け加えれば、自分の足で大地を踏みしめているという充実感。自然に溶けこんだ時の解放感、美しい山々を眺め、川のせせらぎの音、小鳥の囁きを聞く。全てが五感に訴えてくる。

私の山は、蝶との出会いから始まった。蝶の羽の微妙な色の組み合わせは、よくぞ自然がここまで美しく創造できるのかと感嘆させられる。その飛び交う様は、種類によって形態が違いなわばりを主張している。そして2～3週間の短い命を謳歌する。

蝶の幼虫の食べる植物は、種類によって違う。春の女神ギフチョウはカンアオイ、森の精ゼフィルスはハンノキ等、そしてなじみのアゲハは柑橘類やサンショウの葉を食べる。

最近は、興味が蝶から植物に変わり、少しづつ植物の名前を覚えようと思うが、類似の品種が多く、すんなりと頭に入らない。そのうち鳥の声が聞き分けられたらと思うが、いつの日やら……。

先日の天声人語の中にこんなことが書かれていた。「科学も芸術も、自然を学ぶことから始まる」納得！！

―建構造・梶井照仁

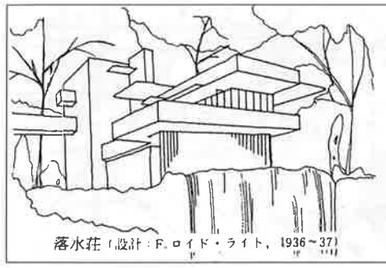
世界文化遺産と里山

里山と言う活字を最近目にするようになった。新しい言葉だと思えるけれど新しいイメージではない。自然とか人間とか花とか昆虫とかに区別されていたものが、一つの輪の中で見られ話されるようになったのではなかろうか。

私は現在日本の秘境と言われた五箇山の合掌造り集落のど真中に住んでいる。そして一昨年世界文化遺産にも登録された。合掌造り集落と里山のイメージは現在観光地のように見られている集落とは少し違いはあるが、観光客を外せばそこはまさしく日本の農村の持つ豊かな自然と美しく静かな地である。私達は未知の物新しい物そして歴史の中で失ったものまで興味を持ち旅をし現地に出かけてゆく。そして「おもしろかった。楽しかった。なんもなかった」で終わってしまう。私は今合掌集落に住んで逆の立場にいる。何を期待し何を見にそして何を持ち帰るのだろうかと。大型バスで乗りつけた多くの人達は3、40分で村を見わたして帰るだけで、山村の持つ生活や文化に触れる様にも見えない。バスのフロントには「世界文化遺産見学と北陸グルメの旅」と大書きはしてあっても、本当は温泉につかっておいしいものを食べるのが目的とみえる。世界文化遺産の名の確認に来たのであって、そこから何を学び体験しようなんて多くの人達にはみえない。

しかしここで少しだけ考えてほしい。戦後わき目もふらず働いてきたつけがバブルで消えてしまったと。多くの文化を失ったり国際的にも信用なくなりつつあるのは何なのか。今こそ里山の中に隠されているエネルギーや知恵を、先人の育ててきた歴史や文化から学ばなければ、私達が里山に住む世界文化遺産を守り伝えていく意味もない。

―写真家・池端　滋(平村相倉で民宿経営)



有機的建築を考える。

(新潟工科大学学生・冨永禎秀，高橋理恵)

時空のまちづくり

野々市町は石川県のほぼ中央に位置し、古くから水路、陸路の交通の要所であったことにより「市」が開設され、「野々市」と呼ばれていたことが町名の由来と言われています。昭和32年に8300人であった人口は平成７年の国勢調査では４万2944人へと発展しています。このような人口増加の中、町では土地区画整理事業による面的整備を積極的に導入し、市街化区域のほぼ50％にあたる410haが整備済みとなっています。

その中で、最近整備をすすめている御経塚第二地区の概要を紹介します。当地区は町の北部に位置し、南をＪＲ北陸本線、東を国道８号、北西を金沢市に囲まれた約60haの区域で、昭和59年の都市計画の変更により市街化区域に編入された地区であり、交通の利便性等により金沢都市圏の外郭部における広域的商業業務の核として位置づけられています。又、地区内には紀元前2000年の縄文遺跡が発見されており、国指定の史跡公園として整備がなされるなど、古代より歴史的文化環境の豊かなところでもあり、これらを継承する「街」づくり、次に訪れる時代を模索し新たに情報を発信しつづける「街」を目指すことより、まちづくりのシンボルテーマを「2000年から2000年へ時空のまち御経塚」と定め、単に道路、公園等の公共施設の整備を行うのではなく、種々の方策を持ちながら開発を進めています。

用途地域による建築誘導だけでなく地区の土地利用計画を商業業務ゾーン、住居系ゾーン等の７つのゾーンに分け、それぞれに地域シンボル、景観形成ゾーンを位置づけし、それぞれのイメージにあった歩道舗装、街路照明、景観木の植栽、各種サイン等により地区の顔を明確に打ち出す一方、都市計画法に基づく地区計画を導入し、各ゾーンごとに土地利用を細分し、建築用途の細分化、一敷地の最小面積、建築物の壁面後退、かき又はさくの構造制限などにより居住環境等の悪化を防止し、良好な市街地形成が図られるようにしています。そしてこれらの施策の推進体制として地元地権者による街づくり委員会及び土地区画整理組合、行政が一体となって積極的な取り組みを行っています。

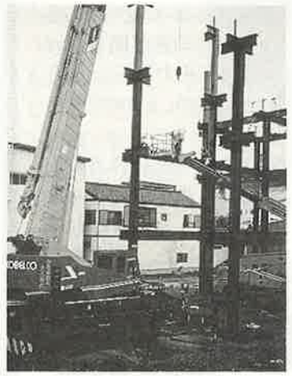
―野々市町産業建設部・森元　裕

今の気持ち

もし私が明日、朝起きてどこか遠い国の青年になっていたら、いったいどんな生活を送るのだろう。少なくとも今とは違った時の流れを楽しむことができるだろうなぁ。

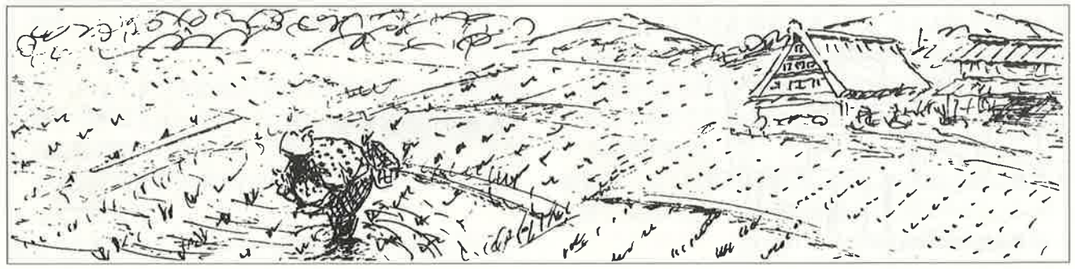
去年の春めでたく『働きすぎの日本人』の仲間入りを果たした私は、今、現実逃避願望のカタマリだ。連休でもとってどこか遠くへ行きたいのだが、その休日も資格取得の為の学校通いでおあずけ。それなら平日は、と言うと帰りは暗くなってから、しかも家に帰ると課題が手招きして待っている。そうそう、とうなずく人も多いのでは……。

私がこの仕事に就いたのは子供の頃からの夢である。漠然と何か大きいものをつくりたいという希望が、学生時代に車でもなく船でもなく建物に向けられた。そもそも、つくりたいと言ってもdesignerの方ではあったが、実際に建物のほんの近くでその成長を見つめることができる現場監督の職に就いて、設計するのとは確実に違う、そして心の底からこみ上げるような喜びを感じた(もちろん設計者にも大きな喜びがあるだろう)。その一つが『建方』その日である。その日は私にとって工事の流れの中で最も緊張する日でもあり、最も嬉しい日でもある。それまで地面下で外観には現れない凹凸と入り組んだ基礎の中を、愛車に乗ることを拒まれそうなほど泥だらけになるまで歩き回っていたのが、それから数日後には赤錆色の巨大な物体が立体として誕生する。



去年、現場事務所の階段からその過程をぼんやりと眺めていたのを思い出す。たとえどんなに忙しくても頑張れる。どんなに眠くても机に向かえる。それが子供の頃の夢の代償と思えば。

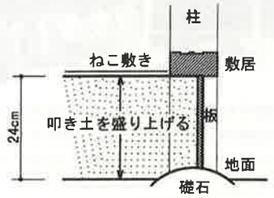
―㈱ウエキグミ・玉村俊一



「一分耕転一分収穫」（収穫を求めれば耕作すべき）

（富山大学研究生・符　伝俊）

もちこみ床の遺構について



もちこみユカの断面

民家を調査していると、今までの民家研究の中で大きく取り上げられていなかった事例や文献だけでしかお目にかかれなかった事例に出会うことがあります。

信州の上田周辺に昔はよくあったといわれる「もちこみ」という土座の形式もその一つです。土座というのは板張りの高床に対して、土間の上にムシロ・ネコなど藁を編んで作った敷物を敷いて居間とする住まい方で、18世紀前期頃まで民家に用いられた形式です。

上田の「もちこみ」は、『滅びゆく民家』(主婦と生活社・1973年)に雑誌「朗」からの引用として掲載されていました。『滅びゆく民家』には高土座の事例として山形市近郊の事例と共に上田市近郊の事例が紹介されていましたが、実態は不明のままでした。

今回、上田市教育委員会の民家調査によって、実例を探し当てることができました。この民家は整型六間取りの間取りで、居室のうち４室が「もちこみ」床でした。以前には６室すべてが「もちこみ」床であったようですが、養蚕には床下通風が必要ということで、２室の「もちこみ」は撤去したのだそうです。

この家では、昭和30年代に住宅を新築して、この旧主屋を倉庫に使っていたために、改造されずに「もちこみ」が保存されました。この建物は後年の改築もありますが、当初の形式が痕跡からわかり、開口部の形式や内法高の低さなど古い民家の形式を伝えており、今から250年ほど前に建てられた民家と推定されます。建物の当初の規模は、間口９間、奥行き４間で、当時の本百姓としては標準より少し規模の大きな民家となりますから、「もちこみ」は上田地方の本百姓層にとって板張りの高床より防寒上有利として用いられたものと考えられます。もっとも、地湿の高いところではできない相談ではありますが。

―信濃建築史研究室・吉澤政己

シリーズ北陸の酒・番外　～イタリア・ワイン一口メモ～

本来このコーナーは北陸の酒にまつわる話を載せるのが筋なようだが、原稿依頼が回ってきた私は最近イタロフィロに変身してしまっているため、番外としてイタリアの酒すなわちワインについて書きたいと思う。日本ではワインと言えば、すぐにフランスを思い起こす人が多いようだが、実際にはイタリアは世界一のワイン生産量を誇る国なのである。とはいえ、現在までのところ確かにフランスワインに較べてわが国への輸入量には大差がある。そこで一口メモ的にイタリアワインを紹介し、イタロフィロを気取りたいのである。

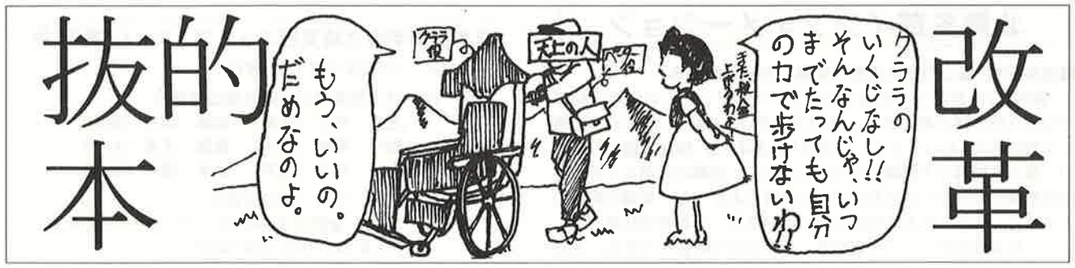
古代ローマ時代ワインの飲用は成人男子に限られ、男たちは女たちがワインを盗み飲みしたかどうかを帰宅して確かめたそうである。男たちは女たちの口に自分の口をあててチェックをし、これが何とキス(バーチョ)の始まりと言われる。時は移り現在では、イタリアの家庭では子供が十歳をすぎる頃から赤ワインを水で割って飲ませるほどにもなっている。ブドウを搾ったジュースすなわちモストを飲み慣れた子供たちには、ワインはさっと入っていけるようである。それに加え、古くは、子供の手足をワインで拭くと力がつくと信じられてもいたらしい。

さて、これほどに身近なワインもきわめて厳格に分類付けられている。たとえば、地域やアルコール度数や熟成期間によって、クラッシコ、リゼルヴァ、スペリオーレ、そして造り方によって、スプマンテ、リクオローゾ、パッシート、レチョート、ヴィンサントなど、さらには糖度によって、セッコ、アッボッカート、アマビーレ、ドルチェといった具合に。また、1963年以降、法的な規制を伴って製造されたことを示すＤＯＣ(統制原産地呼称)、ＤＯＣＧ(統制保証原産地呼称)のシールがボトルに貼り付けられている。もっとも、このシールを貼ったワインの割合は全体の15％ほどである。つまり外国に知られていないワインが圧倒的に多いのである。

こうしたＤＯＣＧワインの中で私が好んで飲むのは、今や有名なキャンティ(赤)である。キャンティCHIANTIはＤＯＣＧの指定が1984年であるが、とりわけ大手のルッフィーノ社のものが名高い。とりわけキャンティ・クラッシコ・リゼルヴァ・ドゥカーレが最高もの。また、現在もっとも有名なイタリア・ワインであり最高級のＤＯＣＧを有するブルネッロ・ディ・モンタルチーノは強いワインであるが、プラムとアーモンドの香りがあり、辛口であるものの、飲んだあとにやわらかさが残る、仲々粋なワインである。私は土産として必ずこのワインを買ってくることにしている。

キャンティもブルネッロもともにイタリアのトスカーナ地方産のワインであり、日本でもかなり普及している。とはいえ、北陸では本格的なワイン・バーは少なく、あったとしてもイタリア・ワインはまだ中心的位置を占めてはいないので残念である。もっとイタメシ屋が増えてスパゲッティとワインでこむずかしい建築論に夢中になれることを望む今日この頃である。

―福井大学・白井秀和



（金沢工業大学大学院生・前田哲宏）